

「森とともに」

人類の歴史を俯瞰すると、人々の暮らしは住居も食料も燃料も、つい最近まで森の恵みと共にあった。急激な社会構造の変化で、暮らしが森と離れていくにつれ、多くの森林は日が差し込まない暗い森と化した。森の価値は下がり、使い手も減り続けている。もはや森と人が良い関係を保ち、共に生きることができないのだろうか。改めて森とは何かについて振り返りつつ、これからの森と人とのかわり方について考えてみたい。

森を観ること から始める

森林へのいざない

小山 泰弘

豊かな森に囲まれて

長野県（信州）の森は、多様性にあふれている。南北に長く、標高差も大きいだけに、移動すれば異なる森に出会う機会に恵まれる。

南部の温暖な地域では、アラカシを中心とした常緑広葉樹林が広がっているが、県下の広い範囲は落葉広葉樹が優占する森林となっている。この代表と言われるブナは、北部の多雪地域で多く見られることから、雪国の樹木というイメージが強いが、実は県内のほぼ全域で見ることができ。実際、全国的に見てもブナが自生していないのは、分布南限である鹿児島県よりも南に位置する沖縄県と、標高の高い山が存在しない千葉県だけで、残る四五都道府県に生育していることから雪国特有ではない。ブナは、豊かな土壌があつて、頻繁な攪乱が少ない場所を好むため、頻繁な土砂崩壊や、人為による伐採が繰り返される場所では存続が難しい。現在、私たちが「さとやま（里山）」と呼んでいる地域は、古くから人々が利用してきたことから、ブナが失われ、コナラやクリなどの別の落葉広葉樹を中心とした森林になっている。とはいえ、すべてが落葉広葉樹の森というわけではない。岩場などの痩せた土地では、アカマツやヒノキ

などの常緑針葉樹が育っている。特に木曾谷から北アルプス中部にかけては、日本最大美林の一つに数えられた木曾ヒノキをはじめとする常緑針葉樹の木曾五木も多い。

里山の奥には、ブナ林が残ることも多いが、標高が高くなるとブナが育たなくなり、亜高山帯と呼ばれるシラビソやコマツガなどの常緑針葉樹林が広がり、さらに上がった高山帯では森林限界に達し、地上を這って広がるハイマツが優占している。

このように、信州の森林は、標高や積雪の有無、人為のかかり方などで、さまざまな表情を見せてくれる。その結果、県内を移動するだけで違った表情の森に出会うことができる。

その傾向は、私たちが育ててきた人工林でも同様である。人工林は、森林所有者の財産価値を高めるため、住宅などに使える経済的な価値が高い樹木を育ててきた。県外ではその多くがスギまたはヒノキであることが多いが、本県で最も多く植栽されてきたのはカラマツである。現在見られるカラマツが植栽されたのは、第二次世界大戦後の昭和三十年代のこと。高度経済成長期にさしかかった日本では、土木建築用資材の需要が大きかった。そこで寒冷地域でも成長が早く、高い強度が得られるカラマツに目を

つけ、土木用資材や建築用資材などに使用する目的で植えてきた。

だからといって、全県でカラマツばかりを植えてきたわけではない。地域別に見ると、カラマツが多いのは東信と諏訪だが、他の地域では他の樹種も多く植えられている。日本で最も多く植えられたスギは県の南部と北部、ヒノキは伊那から木曾周辺、アカマツは伊那から松本周辺となっている。つまり人工林だけをとってみ



黄葉したカラマツ人工林

森を観ることから始める 森林へのいざない